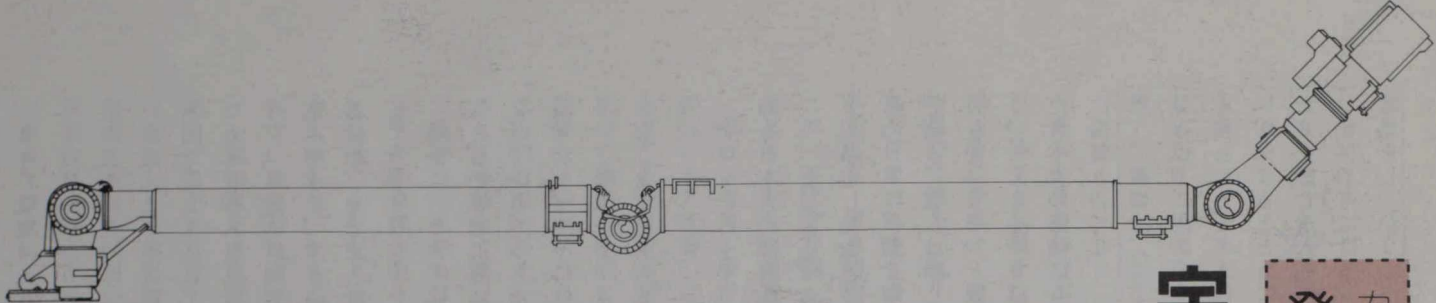


カナタ人の
発明発見(x)

宇宙船の“腕”(RMS)

遠隔操作で各種の作業



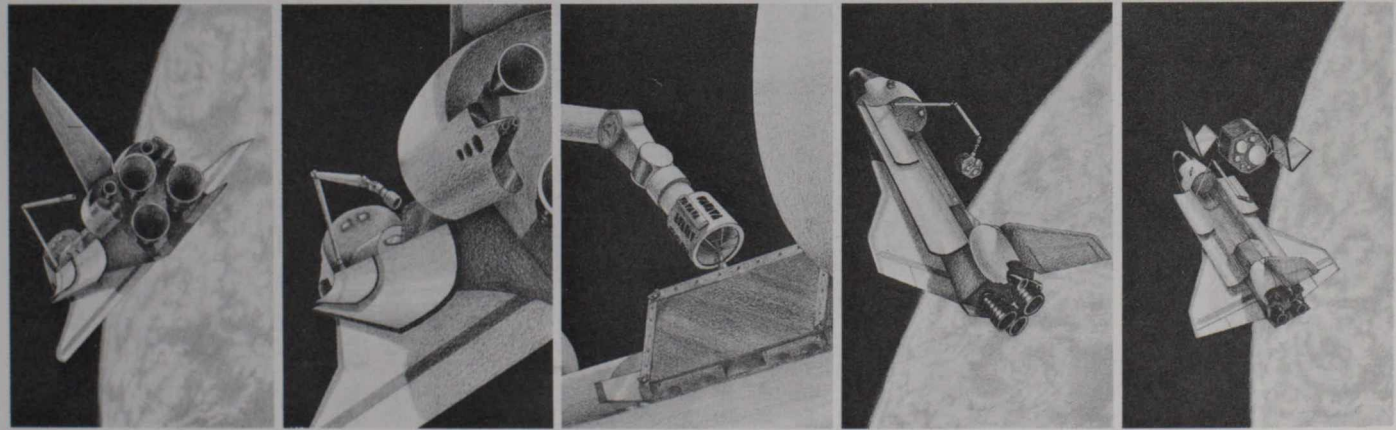
米国のスペースシャトル「コロンビア」が、四月中旬、五十四時間の初飛行を終えて無事帰還したことは、まだ耳新しい。米国は、今後スペースシャトルを使って、いろいろな科学実験や宇宙観測、さらには宇宙ステーションの建設などを行う予定だが、そこで重要な働きをすることになるのが、トロントのSPARエアロスペース社が開発した遠隔操作システム(RMS)である。

これはスペースシャトルの、「いわば腕」に当るもので、飛行士は宇宙を飛び

ながらこれでシャトルの貨物室から衛星をつかみ出して正確な軌道に乗せたり、飛行中の衛星を修理したり、回収することができ。さらに、宇宙飛行士が宇宙船の外で作業をしたり、故障した宇宙船から乗員を救助したり、TVカメラで宇宙船の外側に張つてある断熱板の状況を調べたり、あるいは宇宙に運ばれた構造物を使って太陽熱大型ステーションを組み立てることもできるといふ。

この「腕」は、電柱を二本つないだぐらしい長さで、宇宙空間ではバスほどの大きさ、および重さの荷物を自由自在に運ぶことができる。人間の腕と同じ働きをするように作られていて、形も肩、腕、ひじ、手の部分からなっている。今後は、宇宙での作業だけでなく、海底での建設作業や原子力産業といった危険な仕事にも応用されて威力を発揮しそうだ。

遠隔操作システムの開発は一九七四年にはじめられ、その第一号機が今年の二月、米宇宙局(NASA)に届けられた。SPAR社では、NASAからさらに三基の注文を受けている。



編集後記

○ある雑誌に、アメリカのタイム社が人工衛星を使ってテレテキストの実験を行う、という記事が載っていました。この中で、「システムは、意外にもカナダ通信省が開発したテリドンを使い」となっているのに少々びっくりしました。あの技術先進国のアメリカが外国の技術に頼るのは意外、ということでしょう。しかし、カナダにもこういう高度な技術があったのか、というニュアンスも感じられます。

○この記事の筆者にそういう意図は全く無かったかも知れませんが、ビデオテックスや情報革命に関するこの記事を読んでも、取り上げられるのはいつも英国やフランスのシステム——という状況を見ていますと、ついそのように勘ぐってしまうのです。そろそろカナダの技術にも目を向けてもらいたいものです。

○平野教授のコラムは今号で最後となります。長い間ご愛読ありがとうございました。

○久しぶりで読者調査を行うことになりました。皆さんのご協力をお願いします。忌憚のないご意見をお待ちしています。(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考へ方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒100 東京都港区赤坂七丁目三十三八
カナダ大使館広報部